# 聞き書きで介護の世界が変わっていく
## ～介護民俗学の実践から～

デイサービス「すまいるほーむ」管理者　六車 由実 氏

**【司会】** 本日のオープンカレッジでは、六車由実先生をお招きしています。六車先生はもともと民俗学がご専門の先生でしたが、ある日、一念発起で介護の世界に飛び込まれました。そして、民俗学的手法を使って介護にアプローチされ、「介護民俗学」という聞き慣れない分野を提唱されています。この分野では最初のご著書『驚きの介護民俗学』が2013年、第2回の日本医学ジャーナリスト協会賞を受賞されています。ちなみに、2冊目の本『介護民俗学へようこそ！』は新潮社から出ております。この両方をお読みいただくと、六車さんが取り組まれている全容が分かるのではないかなと思います。

どちらの本もすごくおもしろくて、私は発行されたときに読んで、いずれ当社でお呼びしたいなとずうっと思っておりました。ずうっと思っていると幸運はやってくるもので、今年のゴールデンウィークに静岡に演劇を見に行ったときに、たまたま六車さんがその会場にいらっしゃったので、思わず、その場で講演をお願いしたという次第です。

きょうは、「聞き書きで介護の世界が変わっていく――介護民俗学の実践から――」という講演を1時間ほどお話しいただいて、その後、フロアともディスカッション等をできればと思います。

では六車先生、ご講演をよろしくお願いいたします。（拍手）

## 講　演

### 驚きの介護民俗学

こんばんは。六車です。きょうはお招きいただきまして、ありがとうございます。

ふだん講演させていただく会は福祉関係が多いものですから、こういった場所でお話しさせていただくのに、どんなふうに聞いていただけるのかというのはまったく予想がつかないので、きのうも非常に緊張して眠れなかったんですけれども、何かどこかで引っかかるものがあればいいかなと思っています。

お話を始める前に、きのうの相模原の事件で、亡くなられた方に心からお悔やみを申し上げます。

私自身にとっても非常にショッキングな事件でとても動揺しています。あの事件を個人の資質の問題として考えるのか、施設の問題と考えるのか、あるいは社会の問題として考えるのかというのが、まだ私の中ではほとんど整理がつかないんです。自分自身、福祉にかかわっている人間として、あの事件をどういうふうに受けとめていかなければいけないのかという点については、これからじっくりと向き合っていきたいと思います。きょうの話も、直接ではないにしても、どこかでつながる、それを考えるためのきっかけや手がかりになればいいかなと思っています。

きょうは「聞き書きで介護の世界が変わっていく――介護民俗学の実践から――」ということでお話をさせていただきます。私は大学の民俗学の教員を7年前にやめて、6年前に介護の世界に入りました。特に介護の世界に入りたくてやめたわけではなくて、いろいろな事情があってやめたわけですけれども、そこで介護に携わりながら、自分が今までやってきた民俗学の聞き書きを介護

の世界で始めてみたら、実におもしろいものが見えてきたというところで2冊の本を書いているんですね。

最初に所属したのは特別養護老人ホームという大きな施設だったんですけれども、4年前から定員10名の小規模通所介護施設・デイサービスすまいるほーむの管理者をしております。すまいるほーむがどんなところなのかということを少しご紹介しながら話を進めさせていただきたいと思います。

皆さんは介護現場をどのぐらいご存じなのか、あるいはどんなイメージを持っているのか分からないんですが、ご自分の中のイメージとすまいるほーむを比較しながら見ていただければと思います。

静岡県沼津市の小諏訪という旧東海道沿いの集落にある民家を改装したデイサービスです。1日の定員は10名ですけれども、登録人数は20名ぐらいです。利用者さんたちは要支援1、2、要介護1、2、3、4、5と、軽い方から重い方まですべての方がいらっしゃって、年齢も53歳から、この間、99歳になった方――でも、おひとりで暮らして自立していらっしゃる方ですけれども――、そういう方もいらっしゃいます。認知症の方もいらっしゃるし、パーキンソンの方もいらっしゃるし、さまざまな病気を背負いながら一生懸命生きている方たちです。

スタッフは全部で9名です。一日2時間ぐらいのパートさんも含めて9名です。福祉の現場ですけれども、福祉のたたき上げの方はほとんどいなくて、私自身もほかの職種から移ってきたのですけれども、たとえばデザイン事務所を自分でやっていた男性が資格を取って、すまいるほーむで働いてくれているとか、演劇を大学で勉強していた若者が来てくれたとか、福祉とは別の世界から来てくれたスタッフも多いですね。そういった自分たちの経験を生かしながら、さまざまなかかわり方をしています。

## すまいるほーむの実践

すまいるほーむで大切にしていることは、利用者さんにとってもスタッフにとっても心地よい居場所であると

太下氏

いうことです。「スタッフにとっても」としているところがポイントかなと思っているんですが、お互いにとってここが一番いいと思える場所をつくろうとしています。利用者さんとかスタッフがそれぞれの経験とか能力を生かして、お互いに認め合って一緒につくり上げている場所なのですね。だから、一方的に何かをしてあげるとか、されるというのではなくて、みんなで一緒につくっているという特徴があります。

たとえば、ふだんの光景ですけれども、先ほど言ったデザインを専門にしていたスタッフが中心となって、いろいろなものをつくったりするんです。介護施設はいろいろな手作業をするわけですが、皆さんのイメージの中でどんなイメージがあるんでしょうか。塗り絵をしたり、何かをつくったりというのが結構幼稚だったりする場合が多いんですね。そうではなくて、利用者さんは80年、90年生きてきた人だから、ものを見る目はすごくあって、それなりにしっかりしたものとか、かわいいもの、デザインがすばらしいものを好むわけです。そういうものをそのスタッフがデザインしてくれて、みんなでつくっています。

写真1はスタッフが踊りを踊っているところです。お話を聞いていたら、利用者さんの中で、昔、踊りのお師匠さんをやっていた利用者さんがたまたまいらっしゃったんですね。そこで、「誰も踊りなんかできない。せっかくだから教えてください」と言って教えてもらったのです。レクリエーションの時間は利用者さんがレクリエーショ

ンをするんですけれども、このときは利用者さんに見られながらスタッフが利用者さんに猛特訓を受けたうえで、お祭りのときに披露しているんです。利用者さんの得意なものを生かしてもらって日々を過ごしているということですね。

もうひとつ、写真２はお別れ会をしているところなんです。高齢者のいらっしゃる場所ですから、亡くなる方も当然いるわけですね。そういう中で、私がこれまでかかわってきた施設あるいはほかの施設でも、今まで一緒に通っていた利用者さんが亡くなったということを他の利用者さんたちに対して隠してしまうということがあったりするんですね。なぜそうするかというと、ほかの利用者さんが混乱してしまうからとか、動揺してしまうからとか、落ち込んでしまうからとか、そんな理由でスタッフが気を使って利用者さんにお話ししないんです。

でも、今まで一緒にいた人が突然いなくなったら、皆さんは不思議に思うし、心配するじゃないですか。でも、それを言えないという状況が多くの福祉現場にはあります。でも、そうじゃない。みんなで亡くなったことを悲しみ、そして思いを共有しましょうということで、すまいるほーむでは、亡くなったという事実ももちろん伝えますし、みんなでお別れ会をすることを常としています。

もうひとつ、写真３は、みんなで座談会をした後のものです。最初にスタッフと利用者さんとともにつくっていくと言いましたけれども、たとえばすまいるほーむをこれからどうしていったらいいかとか、来月の行事について何をしましょうといった話を、利用者さんも含めてみんなで話し合うことになっています。皆さん、結構いろいろな意見をおっしゃってくれて、それをもとに、みんなで次は何しようというふうにつくっていくわけです。これが特徴になります。

このようなすまいるほーむにおける利用者さんとスタッフとの関係性というか、この雰囲気の一番基本になっているのが、きょうお話ししようと思っている聞き書きということだと言えます。

## 介護現場に携わったときに抱いた違和感

その聞き書きの話をする前に、私が介護現場に携わったときに抱いた違和感をお話ししておきたいと思います。それは、支援者としてかかわり続けることへの違和感です。高齢者の介護の現場は、今まで自分自身で生活ができていた利用者さんが、何かができない、たとえば脳梗塞によって左手が使えない、右手が使えない、あるいは認知症になって見当識障害が起きる、記憶が失われるといった形で、何かができないという状態でわれわれの前にあらわれるわけですね。

そうすると、スタッフは利用者さんができないことを「してあげる」という支援者として常にかかわるわけです。逆に言えば、利用者さんは「してもらう」という立場にあるわけです。介護の現場では常に「介護する／される」という非対称的な関係なんですね。これが逆転することはほとんどないわけです。

皆さんの中で、たとえば特養に親戚とかご家族が入られていて、そこに見学に行ったりとか、お見舞いに行ったりした経験がある方もいらっしゃるかと思いますけれども、そういうときにどのような印象を持ったでしょうか。私がかかわったいくつかの施設では、利用者さんがスタッフに対して非常に遠慮しているように思いました。スタッフたちはみんな若いですから、80年とか90年あるいは100年生きてきたお年寄りたちが若いスタッフに常に支えられる、支援の対象として見続けられるということは、自分がその立場になったときに、とても切ないことじゃないかなと思いました。

もうひとつ、『驚き』の方にも書いたのですが、回想法への違和感ということです。私は、民俗学を専門としているときに、お年寄りに聞き書きをして、昔の経験をうかがうというのが仕事だったわけですね。介護の世界に入ったときに、お年寄りに同じように昔のことを聞くという回想法があるということを知って、最初は「同じなんだ」というふうに思って勉強したんです。回想法について簡単に説明すれば、たとえば「認知症フォーラム. com」

の中で説明を読んでみますと、「回想法は、過去を語ることで精神が安定し、認知機能の改善も期待できるとされる心理療法」とされています。具体的には、昔、使っていた道具とか、はやっていた音楽とか、昔の写真等を使って回想を促すわけですね。

それによって、どういう効果があるかというと、「自分の人生の価値を再発見したり、当時の記憶が蘇って情動が活性化したりすることが期待できる。それから、話す、聞く、コミュニケーションをとるという行為が記憶を維持し、認知症の進行をおくらせることにつながる。回想法の有効性は国立長寿医療研究センターで検証され、回想法を実行した人はやらなかった人に比べて認知機能が改善したという結果も出ている」とされています。

確かに回想法をした対象者の認知機能が改善されたり、気持ちが安定したりということもあるかもしれません。だけど、先ほど私が違和感を覚えた関係性についてはいったいどうだろうかということなんですね。介護スタッフは利用者さんの心の状態を安定させること、認知機能を改善することを目的として回想法を行い、どういう変化があったのか、どういう改善が見られたのかというのを評価しなければならない。つまり、対象者は評価の対象になっているということなんです。ということは、回想法を行う場面での介護スタッフと利用者さんとの関係は「介護する／される」という力関係で、ここでも普段の介護シーンとまったく変わらないと言えると思うんです。

人間は関係性の中で生きている動物だと思うので、その関係性が常に「介護する／される」という固定的であったときに、人はいったい生きる意欲を持つことができるのだろうかと私は疑問に思うのです。そもそも認知機能の低下を予防するとか改善するというスタンス自体が、80年、90年生きてきた人たちの老いというもののプロセスを尊重したり、ともに受け入れていくこととはまったく反対なのではないか。つまり、認知機能の低下は、それに抗うんじゃなくて、老いのプロセスとして一緒に寄り添いながら受け入れていくということも必要なのではないかなと私は思っています。

私たちが目指していることは、高齢となっても、介護を受けるようになっても、あるいは認知症になっても、人として尊重されて豊かに生きられるための社会はどうあるべきか、その中で、私たち介護現場で何ができるのかということを常に考えていくことであって、介護民俗学における聞き書きの試みは、まさにそこを考えながら進めているものであると言えるかと思います。

## 「介護民俗学」とは何か

実際、介護現場で聞き書きをするというのはどういうことなのかということなのですが、まず民俗学について説明します。民俗学は、生活のすべての行為あるいは道具、ものであったり、行為であったり、生業であったり、すべてが研究の対象になるんですが、その主な目的は、失われつつある地域の記憶あるいは人の記憶を次の世代に継承していく、ということなんですね。その場合の主たる方法が「聞き書き」です。民俗学の中で聞き書きの語り手となるのは多くが高齢者なんですね。なぜならば、地域においてたくさんの経験を積んでいて、その地域の民俗的な知識を持っている存在だからです。だから、私は民俗学をやっていたときにも常に高齢者とかかわっていたわけです。

その場合の聞き書きのかかわり方としては、調査する側は語り手に対して「教えを受ける」という立場にあります。これはまさにそうなんですね。私たちは、学問的な知識はあっても、その現場で何が行われてきたのか、あるいはその人がどういう経験をされてきたのか知らないわけですから、それを教えてもらうという立場で聞かざるを得ないわけです。

もうひとつ、「聞き書き」って、「聞き取り」とは違うと私はいつも言っているんです。インタビューなんかでテープ起こしされたときに、聞き取りと書かれてしまうことがあるんです。それは常に訂正するんです。もちろん聞き書きというのは「聞いたことを書く」ということでもあるんですが、実は「書くために聞く」ということでも

六車氏

あるんです。「書く」というのは民俗学の世界で言えば論文を書くとか報告書を書くとか、何か記録に取るとかということで、その「書く」という目的があるわけですね。形にするために聞くわけです。報告書を書くために詳細に聞かないといけないから一生懸命聞くわけです。これが民俗学の聞き書きにおける特徴なのです。

ところで、先ほど太下さんが紹介してくださいましたが、介護民俗学は私の造語で、別に浸透しているわけでもなんでもないのです。介護民俗学って何だろうといったときに、最初からこんなことを考えていたわけではないんですけど、改めて言葉にしたときに、こういうことかなと思うんです。「民俗学的な関心や方法によって利用者さんの人生や経験について話を聞くことで、利用者さんを理解し、思い出を共有するとともに、その個人史から彼らの生きてきた時代とか地域の歴史、生活のあり方あるいは人の生き方について考えていく、知っていく」というものが介護民俗学と言えるかなと思うのです。

その場合の介護現場で行う聞き書きですけれども、さっきの民俗学の聞き書きと同じで、私たちの現場を通して利用者さんの記憶を家族とか地域に継承していく。要するに、介護現場というのは、記憶を継承していく仲介役を務めているのではないかということです。

## 「介護民俗学」のポイント

２つ目に、やはり、「教えを受ける」という立場で聞くわけです。３つ目、これがポイントになるのですが、「書くために聞く」のです。先ほど回想法と言いましたけれども、もっと一般的に言えば、傾聴ボランティアという言葉をご存じだと思いますが、その方のお話に耳を傾けるということは常に大切だというふうに言われてきたんです。その場合に、何でそうするかというと、その人の思いを察するために、どんな思いでいるのかというのを察するために傾聴すると言われるんですね。

でも、人の思いはなかなか分からないものじゃないかなと私は思っているんですね。思いとか、その人の態度とかじゃなくて、むしろご本人がお話しされている言葉に真剣に向き合う必要があるのではないか。そのために聞く。書くために聞く、表現するということを目的にすると、聞くという行為はまったく違うものになって、言葉に真剣に向き合うことになるのです。

では実際に、どんな話を私が聞いてきたのか。当然、戦争の話はよく出てきます。『ようこそ』で登場した語りをひとつ紹介します。「彼女たちの挺身隊」と名づけましたけれども、戦時中に国民学校を卒業して学校に行かず、職にもついていない独身女性を挺身隊として組織して軍需工場等に送ることがあったんですね。大正２けた生まれと昭和１けた生まれの女性たちが結構行っているんです。

昭和５年生まれのハルコさんは、国民学校を卒業してすぐに名古屋の陸軍造兵廠で働き始めたんですね。最初は爆弾を塗ったりしていたらしいんですけれども、あるとき知らないうちに風船爆弾をつくり始めた。風船爆弾をご存じでしょうか。日本の当時の秘密兵器だったそうです。大きな風船をつくって、その下に爆弾をつり下げて、アメリカまで飛ばすというものだったらしいです。その風船爆弾の風船の部分を貼りつける作業を彼女は担ったわけです。

戦争の話というと、悲惨な経験についての語りが多いように思われるでしょう。確かに、彼女も身近な人間が亡くなったり、つらい経験をされているのですが、最後に話したことがとても印象的なんです。３階建てぐらいの風船をつくったらしいんですけれども、丈夫にするた

めに、その中に入って内側を張りつけたらしいんですね。「それが真っ白で、すごくきれいだった。だから、嬉しくて、飛び跳ねて遊んだんだよ」と言ったんです。それはまさに当時の10代の少女の感覚だったんだろうなと、戦争ってそういうものだったんだろうなと、本当に素直に私は受け取れたんです。

大正13年生まれのサカエさんも挺身隊の話をしてくれました。沼津は軍需工場がすごく多くて空襲もひどかったんですけれども、その軍需工場のひとつに東京麻糸紡績があったんですね。そこでは朝鮮から連れてこられた若い女性たちも働いていたという事実があるんです。このサカエさんも麻糸の撚り糸の工程で働いていたんですが、朝鮮から来た女の子たちとのかかわりも持っていて、何か差し入れをしたとか、でも、差し入れをすると何か自分に危ないことがあるんじゃないかという危険も感じながら、そういうことをしていたとか、そんな話を聞かせてくれました。

戦争と一言に言ってしまうと悲劇を思い浮かべますけれども、ここに見えてきたのは、ひたすらに一生懸命生きてきた少女たちの姿だったと言えるかと思います。

そういった話とともに、個人の人生について語ってくれる方もいます。ゑみ子さんは幼児期にポリオを患って左の手とか足に麻痺があるんですね。今もそれが強く残っているんです。でも、ゑみ子さんは、もちろん障害の話もしてくれるんですけれども、多くは青春時代の恋愛の話なんですね。結構悲しい恋愛をしていて、妻子のいる方と恋愛関係になって、それが最終的には実らなかったという話をしてくれたりしたんです。

話をしている中で彼女が自分を「ゑみ子」と呼ぶときと「きよこ」と呼ぶときがあったんです。最初、何を言っているのか分からなかったんですが、どうやら使い分けているようだったんですね。それで、率直に聞いてみました。2つの名前は何か？と。すると、ゑみ子さんは、こう答えてくれました。「生まれたときにつけられたのはゑみ子なんだけど、ポリオの後遺症が残って障害を負ったときに、お母さんが拝み屋さんに聞いて、障害を忌むためにつけた名前がきよこ。家族はみんなきよこと呼んでいて、自分の結婚した旦那さんも一生、きよこと呼び続けていた」と。2つの名前を背負って彼女は生きてきたわけです。

でも、一番好きだった青春時代の彼はどうだったのと聞いたら、「ゑみ子と呼んでくれた」というんですね。「彼はゑみ子という名前がいいよといってゑみ子と呼んでくれたよ」と。彼女は言わないけれども、きっとこれが支えになってきたんだろうなと思います。そんなことを想像させるような話でした。

今、いくつか紹介しましたけれども、こんなふうに話を聞いていて、聞き書きによって結果的に変わってきたこと、それを目的としていたじゃないけど、話を聞くことによって変わってきたことがあります。

ひとつは関係性が一時的に逆転してきたということです。利用者さんと私は、介護現場では介護される人と介護する人なわけですけれども、聞き書きの場面では教える人と教えられる人になるということです。それは一時的なものに過ぎないんですが、それを繰り返していくことで何かが変わっていくかもしれない。

2つ目は、利用者さんの人生が立体的に浮かび上がってきたということです。私たち介護の世界で、その方がどんな人生を歩んできたのかをほとんど知らないままケアに携わっていることが多いんです。もちろん、いろいろな情報はいただくんです。病気の情報とか、麻痺の状態とか、そういうのはあるんですけれども、その方がどんな人生を歩んできたのかというのは本当に知らされていないんですね。でも、こうやってお話を聞くことで、何かができなかったり、問題をかかえた人から、すごいなと思える人生の先輩に変わっていく。

そして3つ目に、利用者さんへの愛情が生まれたことです。介護現場はなんだかんだ言いながら大変なんですね。本当に大変なこともたくさんあります。認知症の方について、どうしてこうなっちゃうかなと思うこともあるんです。でも、そこでお話を聞いて、その人の人生が見えてくることで、なんとなく愛情が生まれていったり、

許せるようになってくることがあります。

あえて、これは強調しておきたいんですけれども、支援ということからいったん離れて、民俗学等の支援とは異なる関心から、「表現する」ことを目的として聞き書きをしてみる。たとえば、この人のためとか、ケアに役立つからとかじゃなくて、まったく別の関心から聞き書きをすることによって、利用者さんと支援者ではない、福祉の現場にも人と人としての関係が生まれてくるのではないかと、この聞き書きを通して思い始めました。福祉の現場がもっと豊かな開かれた場所になっていく力を聞き書きが持っているのではないかなと思っています。

## 「すまいるかるた」の試み

今までずっとお話を進めてきましたけれども、ここで、どんなふうに聞き書きをしているのかというのを皆さんに動画で見ていただきたいと思います。最近、試みてきたのが「すまいるかるた」というかるたをつくることなんですね。去年、すまいるほーむが15周年を迎えまして、記念にみんなで何をつくろうかという話し合いをしたときに、先ほどのポリオの後遺症のある𠮷み子さんが「かるたがつくりたい。すまいるかるたがつくりたい」と言ってくれたので、とりあえず、かるたをつくることにしたんですが、イメージが全然わかない。

皆さん、「幻聴妄想かるた」ってやったことありますか。医学書院から出ているんですけど、ハーモニーという精神疾患の方の支援の施設があって、そこの利用者さんが自身の幻聴や妄想を言葉や絵にしたかるたで、すごくおもしろいんです。これをみんなでやったらすごく盛り上がって、これよりおもしろいかるたをつくろうねと言いながら、みんなでつくり始めたんですね。

そのときの聞き書きの様子なんですが、きょうお見せするのは稲夫さんのかるたの聞き書きです。稲夫さんは82歳です。専業農家で一生懸命農業をしてきて、地域の牽引役だったんですね。頼られる存在だったんですが、２年の夏、腰椎の圧迫骨折を起こして治療のために病院に入院したら、せん妄や認知症状があらわれた。それで、病院で身体拘束されたんですけど、ますますひどくなったので退院させられてしまった。

その後、別のリハビリ病院に入ったんですけれども、そこでは薬も打たれて、寝かされて、拘束されてという状態が長期間あったものですから、すごい大きな寝だこがおしりにできました。そして意思疎通もできなくなった。その姿を心配した奥様が、「これはちょっとおかしい。異常だ。このままだとお父さんが廃人になってしまう」ということで退院させて、それから、すまいるほーむに通い始めたんです。半年ぐらいで寝だこも治ったし、明るくお話ができるし、歩くこともできるようになった方です。その方への聞き書きです。

〔動　　画〕

今見てもらったのがその一部なんですけど、前半はお話を聞いていて、後半は、みんなでかるたの読み札をつくるという様子を見ていただきました。

できたかるたは、ご本人に聞きながら、その後も結構直したんですね。実際につくり上げたかるたは「急な斜面はお茶畑に適している、寒さが下っちまって霜がおりないから。そんなことは常識だよ。それが根本だよ」（写真４）というものになりました。ご本人も納得してくれて、きょう紹介するよと言ったら、「それはうそじゃないからいいよ」と言っていました。

こういうふうに実際に聞き書きをして、それをかるたにまとめるときに私たちが大切にしていることは、語ってくれた本人の言葉をできるだけ使うということです。つまり、こちらの言葉に直しすぎないいうこと。それから、語られた内容をまとめ過ぎずに、説明し過ぎたりしないこと。つくるところまで含めれば、全部で１時間ぐらいかけているので、話の内容はお茶畑の話だけじゃないんですね。だから、全部おもしろいから本当はひとつにまとめたいんですけど、まとめちゃうと実はおもしろくなくなるので、最初におもしろいと思ったところを中心に書く。それから、かるたですから、リズムを意識する。それから、何度も本人に確認してオーケーをもらうということです。そうすると、読み札がとても生きてく

るというか、本人の語りのように思えてくるような気がします。

今のビデオを見ていただいて気がついたと思いますけれども、利用者さんとスタッフが共同してつくっています。聞き書きの場面は、語り手の語りに聞き手である私や、まわりで聞いている利用者さんやスタッフが、「エッ、本当」とか「それはおもしろい」と率直に言う。それってたぶんとても大切なことで、『驚きの介護民俗学』の「驚き」ってまさにそうで、話を聞いていると驚くことがたくさんあるんですね。だから、素直に驚く。

そうすると、ご本人もびっくりするんですね。なぜならば、ご本人にとってはあまりにも日常のことだからです。お茶畑を斜面につくるのは霜が降りないからだということはみんな知っていることだと本人は思っているわけですね。だけど、知らない人にとっては、それはすごいことであって、素直に驚くことによって本人も、「これって、実はすごいことなんだ」というふうに自分や経験の意味を再評価することになる。

読み札をつくる場面は、聞き手が語り手の言葉を受けとめて、それを凝縮した言葉にしていく。でも、実は、読み札作りをみんなの前でするというのは、初めは意図があったわけではなく、その場の流れで、偶然そうなったんですね。その場でまとめちゃおうということでやったんですけど、これって、つくる方にとっては緊張感のあるものだったんですが、ものすごく成功したなと思うんです。つまり、かるたをつくるという場面自体が舞台性を持っているというか、見る、見られる関係がさまざまに入れかわって、非常に舞台性を持っているおもしろい試みだったなと思います。

## 「聞き書き」事始め

このように、すまいるほーむでは、いろいろな聞き書きの試みをしてきているんですけれども、最初の方は聞き手と語り手の１対１の対話だったんですね。最初に私が入った特養では、みんなの前で聞き書きをすることについてスタッフの理解もあまり得られなかったので、そ

の方のお部屋とか別な場所に移って１対１で聞き書きをしていました。

それはそれなりにとても深い時間を過ごすことができるんですけれども、すまいるほーむに移ってきてから聞き書きをしようと思ったときに、実際問題として、私は管理者なのですが、スタッフが日に４人しかいない中のひとりの介護スタッフでもあるので、１対１で話を聞いている時間はほとんどないんです。また、お部屋も狭いので別な場所に移ってというのはなかなかできない。だったら、みんなの前で聞いてしまおうということになりまして、あのように皆さんがいる中で、ある利用者さんに対してお話を聞くようになったんです。

そうしたら、最初は何を始めたんだというふうにスタッフも含めて驚かれたんですが、だんだんそこに自然に入ってきてくれるようになった。ああいうふうに相づちを打ったり、自分で質問したり、突っ込みを入れたり、そんなことをしながら、「１対１の対話」がもっと開かれた、「オープンな対話」になっていったと言えるかと思います。

それによって、いろいろな声がそこにまじってくるようになった。多声性といいますか、いろいろな声がまじってきて、そのおもしろさもあります。あるいは、みんながその場にいるということで、その方の思い出が自然と共有されるようになっていったと言えるかと思います。

それから、介護現場では、利用者さん同士もお互いのことを知らなかったりするんですね。だから、会話もあまり成り立たなくて、同じフロアに一緒にいるのにそれ

ぞれポツンと座っていたりするんです。しかし、聞き書きを始めることによって、お互いに関心を持ち始めて、私たちがいなくてもお互いに聞き書きをしている、聞き書きし合いっこしているみたいな感じになりました。

それから、利用者さんとスタッフあるいは利用者さん同士の関係が、その場に応じて、あるときにはこの人が先生のようにお話を聞かせてくれたり、あるときには別の人だったり、関係が固定的なものではなくて柔軟に変化していくようになりました。

もうひとつ、とても大切なことですけれども、聞き書きをしていない場面でも、誰もが自分の考えとか意見を言いやすい環境になってきたということです。これはとても大切なことだなと思うんです。スタッフも何かをしようというときには、まず利用者さんに聞くということが自然にできるようになってきたんですね。たとえば後で紹介するように、行事のときに思い出の味といって、利用者さんひとりひとりの思い出に残っている料理をつくったりするんですけど、その料理をつくるときに、私が聞こうとしなくても自然にスタッフがすぐにその人に話を聞いてくれたり、すまいるほーむで何かをするときにも、必ずまず利用者さんに話を聞くようになってきました。

このことはすごく大切なんです。すごく大切というより、介護現場ではあまりない環境なのではないのかなと思うんです。先日、運営推進会議をすまいるほーむで開いたんですね。といいますのは、この春から、小規模のデイサービスは県の管轄から市の管轄になり、地域密着型通所介護という位置づけになったのです。そのために小規模のデイサービスは市役所の担当者とか地域包括支援センターの職員とか、あるいは地域の自治会の方を呼んで、地域の中でどういうふうにデイサービスを行っていくのかという会議を開くことが義務づけられたんですね。先週、私たちも運営推進会議を行いました。その会議には、その日の利用者さん全員にも参加していただいて、みんなで活発な議論をしたんです。そうしたら、市の担当者が思わず、「こんなふうに利用者さんがどんどん話をするところは初めてです」と言ったぐらい、利用者さんもスタッフも垣根なく自由に話ができる環境というのは、稀有なことなんです。

## 「人生すごろく」による他者の人生の追体験

先ほど、かるたのお話をしましたけれども、聞き書きの表現の形はいろいろあります。私が民俗学を専門にしていたときには、文章を書くことを仕事にしていましたから、聞き書きを文章に表現するということから始めました。そして、ひとりひとりに「思い出の記」という冊子をつくったり、聞き書きをもとに本を書いたりして、それを利用者さんとか家族に贈るということをしてきました。また、スタッフにも読んでもらいました。

利用者さんからは、「おれの宝だ」とか、「これからも私の小説を書いてね」と喜んでいただきました。あるいは、先ほど言ったことですが、利用者さんの記憶がこの本を介して家族やスタッフに継承されていく。先ほどのすまいるかるたの聞き書きの場面とは違って、聞いたことを書くという時間は私ひとりの孤独な時間ですけれども、それは、そこにはいらっしゃらない利用者さんと静かに対話している時間にもなったかと思います。

それから、すまいるほーむに来てからは「思い出の味の再現」という試みを始めたんです。これだけの長寿社会の中で、特に女性の平均寿命が非常に長いですよね。デイサービスに通って来られる方も女性が多いんですね。すまいるほーむでは、８割ぐらい女性なんです。それで、お話を聞いていると、お料理の話が出てくることが多いんです。その料理の話を聞いていると、とてもおいしそうで、私も食べてみたいという思いが強くなる。なので、その方の子ども時代とか子育てをしてきた時代の料理について聞き書きをして、それをみんなでつくって味わうということをし始めました。そのときには利用者さんが主役となって料理の先生となるわけです。

この写真５で料理を教えてくれているのは、真ん中の方で、大衆酒場の女将さんをしていた方でした。その方にスタッフが聞き書きをすると、「一番人気だったのはニ

ンニクたっぷり餃子だよ」と話してくれたので、そのお店の雰囲気も醸し出しながら、ニンニクたっぷり餃子をみんなでつくったんです。たまたま地元の中学生が遊びに来てくれたので、その子にも利用者さんが教えてあげている。その方の思い出の味をみんなで味わうことで、その方の味が思いとともにみんなに伝わっていったのではないかと思います。

それから、去年、試みたのが、聞き書きをすごろくにして遊んでみるというものでした。これもおもしろい試みだったんです。私が聞き書きをする時、スタッフも手伝ってくれていたんですけれども、スタッフの中の看護師の羽柴さんが、「自分にも聞き書きができるのではないか。だけど、六車さんのように文章にするのはなかなか難しいから、何ができるかな」といろいろ考えて、すごろくにすることを思いついたんですね。すごろくなので、ます目にそれぞれのエピソードを載せていって、それをたどっていくという形です。

羽柴さんが最初に試みてくれたのが、靖子さんというアルツハイマー型認知症の方でした。靖子さんは、ちょっとしたことで怒りだして、あばれたり、他人を非難し続けたりする方で、私たちスタッフも、どういうケアがいいのか手探り状態でした。そのときに羽柴さんが、「人生すごろく」をつくってくれたのです。

羽柴さんは、その中にいろいろな仕掛けを仕込んでくれました。靖子さんの人生をたたえる言葉をたくさん散りばめてくれたり。たとえば、「小六のとき、カイコの品評会で沼津１位となる。杉本家、有名になる。おめでとうと三回言いましょう」といって、そこにとまったら、みんなで「おめでとう、おめでとう、おめでとう」と言うんですね。そうすると、靖子さんが、そのときに手を合わせてお辞儀をしたんですよ。ふだんは絶対しない行為で、私たちもとても感動しました。

それから、靖子さんは、同じことを繰り返すことがよくあるんですが、その中にすごく印象的なエピソードがあって、「子どものころに、お父さんが酒を飲んで帰ってきたときに、大きな棒を持った男に脅された。命からがら逃げた」といった話をよくしてくれるんですね。それをますのエピソードも取り上げて、そこにとまったときには、そのエピソードにかかわるセリフをみんなで言い合いお芝居をする等という仕掛けもありました。

「父、かんきちさんは婿であったため、たびたび伏見の実家に酒を飲みに帰って行った。とある日、その帰り道に鉄の棒を持った大男に出会ってしまう伏見大男事件」というます目があって、そこにとまった人が「金をよこせ」と言い、となりの人がかんきちさんの役割をして、「2,000円渡します。どこのどなたか存じませんが、ここを通してください」という演劇をしてみる。これはなかなかおもしろかったなと思うんです。それによって、みんなで靖子さんの人生を追体験していくことになりました。

今まで、ほかの利用者さんにとっても靖子さんという存在はなかなか厄介な存在だったんですけれども、これをやることによって靖子さんの人生を肯定していけるようになってきたように思います。遊びながら、その方の人生がみんなに受け入れられていったと言えるかと思います。

## 個人の歴史を刻んで継承する「すまいるかるた」

先ほどのかるたですけれども、今までお話ししたのは、たとえばひとりの人の「思い出の記」、あるいはひとりの人の「思い出の味」等、対象となる方をそのつど変えていったんですけれども、この「すまいるかるた」の中には利用者さんとスタッフと全員の思い出をそこに詰め込む形になりました。利用者さんについては先ほどのような形で聞き書きで読み札をつくって、スタッフについては利用者さんがスタッフに質問をして、読み札をつくってくれました。今年の春にようやく完成して、6月21日にお客さんを招いてお披露目会を開催しました。その様子をビデオでお見せします。

〔動　　画〕

見ていただいたのでお気づきだと思いますけれども、かるたって、普通は「あいうえお」とか「いろはにほへと」

と並んでいて最初の文字を取るじゃないですか。最初はそういうふうにつくろうと思っていたんですよ。だけど、聞き書きを中心にやるので、まず話を聞いて、それを文章にまとめますよね。だから、「あいうえお」にあわせて札をつくるのが意外に難しいということが分かって、取る字は、最後でも最初でも途中でもいいということにしました。文章をつくった後に取る文字を考えたわけです。だから、実際にゲームをするときには、最後まで聞いてからじゃないと札は取れないですよ、と言ってからかるたを始めるんです。

そうすると、結構おもしろい効果があります。皆さんもやってみて、かるたって、最初の文字でパッと反応して、競争になって、せっかくおもしろい読み札なのに、それを全然聞いてくれないということが、今まですまいるほーむでもあったのですね。でも、最後まで聞かないと分からないということになったので、みんな最後までちゃんと聞いてくれて、それから取るようになった。そうすると、その人の語ってくれた人生がみんなに伝わっていくようになった。みんな、その文章をおもしろがってくれるようになったわけです。

もうひとつ、かるたって、つくってみておもしろいなと思ったのは、未完成の可能性があるということです。私、今まで聞き書きをいろいろな形にしてきましたけれども、たとえば文章だったら文章でひとつの完結したものになるし、すごろくだって完成したら完結したものになるわけですね。でも、話って、その後もどんどんたくさん出てきますので、それをつくり変えていける、あるいは追加していけるような形ってないかなとずっと考えていました。

このかるたを作っている時には気づかなかったのですが、46文字分つくり終えてみたら、たとえば「ガギグゲゴ」とか「ギャギュギョ」とか「パピプペポ」とか、濁音とか半濁音とか拗音なんかも入れればもっともっとたくさんつくれることは分かったんです。そうすると、新しい利用者さんとか新しいスタッフが加わったら、そのたびに読み札を追加していくことができる。それによって新しいメンバーを受け入れていくきっかけにもなるなと思いました。あるいは、これから先、亡くなったり、すまいるほーむを去っていく人も出てくるかもしれない。でも、亡くなった後も、去った後も、その存在は決して消えずに、かるたをするたびに思い出されるということになっていくだろう。そうすると、かるたは個人の記憶を残していくとともに、そうした個人が集まってくる、集うすまいるほーむという場所の歴史を刻んで継承していくことにもつながるのではないかなと思って、実はすごい表現方法じゃないかなと私は感じています。

ちなみに、このすまいるかるたのお披露目会のもう少し詳しい報告については、医学書院のウェブマガジンの「かんかん！」にも出ていますので、ぜひごらんになっていただきたいと思います。

## 自分が老いたときにどういう社会であってほしいか

このように私の民俗学的な関心から始まった介護民俗学の聞き書きですけれども、もう少し広い意味での「表現する」ことを目的とした「聞き書き」へとだんだん変化してきました。その聞き書きの方法も表現の形も実践の場を通して少しずつ変化を遂げてきたと言えると思います。

改めて聞き書きというものを振り返ったときに、聞き書きというのは利用者さんひとりひとりの人生に深く向き合う行為であるとともに、利用者さんとスタッフあるいは利用者さん同士の「開かれた対話」であるとも言えると思います。あえて「支援」ということを目的とせずに、「表現する」ことを目的とすることによって、人と人としての関係が回復して、お互いの人生を認め合ったり思い合ってともに歩んでいく、それぞれの居場所になっていくんじゃないかなと思っています。

「問題解決」とか「支援」を目的として介護現場は成り立っているんですけれども、そういった介護現場の「ケアする／される」という一方的な関係性とか非常に閉塞的な空間をダイナミックに変えていく可能性を聞き書きは持っているのではないかと思っています。「表現としての

聞き書き」で支援を超えようというのが私の今の目標です。

最後です。皆さんもご存じのように、介護保険制度はどんどん変わってきています。ことしの春の改正も非常に大きなものでした。どっちの方向へ向かっているかというと、ひとつは介護とか認知症の予防に重点が置かれるようになっています。最初に回想法のところでも述べたように、予防を重視するということは、つまり老いのプロセスに抗うということが強要されるということだと私は思っています。

２つ目に、重度者への支援に重点化されるようになっています。特別養護老人ホームは今まで介護１の方も２の方も入れたんですけれども、ことしの４月からは要介護３以上でないと基本的には入所できないとなっています。だから、より効率的に重度の人をケアしましょうという方向に向かっているんですね。

一方で、これからは、軽度の要支援１、２、要介護１、２の方は介護保険から切り離れて市町村管轄の総合事業に移されていきます。それはボランティアも含めた地域の互助と自己責任にゆだねられるということなんですね。当初、介護保険が目指していたものとはまったく反対の方向に向かっています。

この問題で私が一番大きいと思っているのは、重度者と軽度者を分けようという意図なんですね。先ほども言ったように、私たちすまいるほーむには支援１から介護５までの方がいるんです。おととし、県の担当者が実地指導に来たときに、「支援のレベルが違う方たちがどうして同じ場所で同じことをやっているんですか」と批判されました。私はそのときに「一緒にいるから意味があるんです」と答えました。重度の方だからできない、軽度の方だからできる、ということではないのです。普通の社会は、できない人がいて、できる人もいて、その中でお互いに助け合って生きていると思うんです。

すまいるほーむも同じで、できない人に対してできる利用者さんが手伝ってあげるということもありますけれども、重度の手足もなかなか思うように動かない、車いすで過ごしている方が軽度の認知症の方を励ましたりしているんですよ。いろいろな人がいて、お互いに助け合って生きているというのが本来あるべき社会だと思うんです。けれども、介護保険が向かいつつあるところは、これを切り離してしまおうということですね。

もうひとつ、私たちにとって切実なことは、私たちのような小規模のデイサービスの報酬が大幅に切り下げられているということです。そのかわりに特養をいっぱい建てようとしているわけです。すなわち、施設を大規模化していこうという方向にあります。それは一方で必要なことかもしれないんですけれども、小さなところで営んできた利用者さんとスタッフ、利用者さん同士の親密な関係は、大規模な施設ではどうしても築きにくくなるのかなと思います。

私たち介護の事業所をやっているものとしては、非常に厳しい現実になっているんです。だからこそ、このすまいるほーむでの実践のような人と人との関係を回復させて、重度の人も軽度の人も、そしてスタッフも老いのプロセスに寄り添いながら、ともに支え合う場としての介護現場が必要になってくるのではないかと思っています。

きのうの相模原の事件もそうですけれども、何よりも、それは自分の問題だ、老いは自分がならないんじゃなくて、いずれは自分も老いていくという想像力をいかに持つか、ということだと思います。自分が老いたときにどういう社会であってほしいかというのを常に考えていくこと。それは人が最期まで人として豊かに生きられる社会だと思うんです。そのために私たちはこれからも現場で取り組んでいきたいと思っています。

これで終わりにします。ありがとうございました。（拍手）

## 質疑応答

**【司会】** 六車先生、どうもありがとうございました。いかがでしたでしょうか。介護施設、高齢者の施設はふだん、皆さんはあまり接点がない施設と思われているかと思いますけれども、きょうのお話を聞いていただいて、確かに施設としては縁がないかもしれませんが、そこで起こっていること、新しい人間性、人間関係の構築みたいなことはわれわれの社会全体にも大きく関係してくることだと思います。

せっかくの機会ですので、短い時間になりますけれども、ご質問等ある方は六車先生にお願いしたいと思います。

**【質問】** いろいろありがとうございました。

すまいるほーむのように接してくださると、たとえば私が年を取ってもこういうところに入りたいなと思うわけですけれども、こういうホームが非常に少ないということは、どの点に問題があるとお考えでいらっしゃいますでしょうか。

**【六車】** いろいろな問題があると思いますけれども、ひとつは働き手がいないということが多いですね。働き手がいないということのひとつの要因としては、非常に給与が低い、ですのでなり手がいないということですね。それによって現場が密な関係を保てるようなところまで回っていかないということが非常に大きい要因かと思います。でも、私が思うに、そういう介護の現場を変えていったり、社会を変えていくためには、現場に閉ざされていない状態が必要なのではないかなと思うんです。

川崎の施設で入居者を屋上から投げ落してしまうという事件がありました、施設に問題があったとか、個人に問題があったとか言われていますけれども、私は、一番問題なのは介護現場の閉塞的な状況だと思うのです。それをどう変えていくか。もちろん介護現場が変えていかなければいけないことは確かですが、地域であるとか、家族であるとか、いろいろな方がそこに入っていき、どういうことがそこで行われているのか、どういうことをしてほしいのかというのをどんどんそこに行って発言していかなければ絶対に変わらないと思います。

六車氏

すまいるほーむで大切にしていることは、閉ざされていないということで、常に誰でもウェルカムです。だから、地域の人も来ますし、取材にも来ますし、見学にもいろいろな人が来ます。私たちにとっても、介護をする側にとっても刺激にもなりますし、その状態が一番いいんじゃないか。多様な人たちがかかり、いろいろな声がそこに入ってくるということが、とにかく介護現場を変えていくためには絶対に必要なので、私たちの責任とともに、皆さんもどんどんそこに関心を持ってかかわっていっていただきたいと思います。

**【司会】** ありがとうございました。

ほかに何かご質問ございますでしょうか。

**【質問】** 先生、ありがとうございました。非常に参考になりました。

現場からごらんになっていて、たとえば行政であったり、政治家の皆さんも含めてかもしれませんが、老いだとか死に向かっていく人間に対するまなざしはどういうふうに映っているのか、感覚でいいので教えていただきたいと思います。かなりフワッとした質問で大変恐縮なんですが、お願いします。

**【六車】** 最後に申し上げたように、たとえば認知症であったら、「認知症は予防しましょう」「認知症にならないよ

うにしましょう」と考えるのが一般的なようです。認知症に限らず、高齢になって介護が必要になった人に対しては、言葉には出さなくても厄介者、効率的ではない存在というふうに扱われているのではないでしょうか。それがある限りは、障害者の方も同じだと思いますけれども、きのうのような事件はまた起こるかもしれない、あるいは川崎の事件のようなことがまた起こるかもしれないと思います。

私は「弱者」という言い方は好きではありません。誰が「弱者」で誰が「強者」かって、いったい誰が分かるのかと思うのです。すまいるほーむを例にとったときに、利用者さんはいろいろなことができないですよね。そういう意味では弱い存在かもしれません。でも、私もほかのスタッフも、ほかの組織であるとか、ほかの社会で不適格者だったわけです。

私なんか研究者として何年も働いていましたけれども、そこに適応できなかったわけです。非常に苦しくなって抜け出して、行き着いた先が介護現場だったわけです。

だから、私も弱い人間だし、利用者さんも弱い人間なんですよ。弱い者同士がお互いに弱さを認め合いながら助け合う社会であるべきではないかな。政治とか行政は、そこにどう寄り添い、どう保証していくのかということを見てほしいけど、そうはならないのが世の中だなと思っています。

**【司会】** ありがとうございます。今の日本の社会のオルタナティブの可能性がここにあるような気がします。

名古屋、大阪の皆さん、いかがでしょうか。何かご質問ございませんでしょうか。

**【質問】** 質問ではなくて感想みたいになって申しわけないんですけど、私も入ってみたいデイサービスだなと思いました。将来、年を取ったら入れてください。

そんなふうに非常に楽しい組織づくりというか、施設をつくっておられるなと思っています。そのポイントというか、やり方として聞き書きは非常に有効であるというお話だったと思います。そういう意味でいうと、六車先生のお話は介護と民俗学を組み合わせるということで新しいイノベーションを起こされたのではないかなと思うんです。

きょうのお話を聞いていると、介護施設だけじゃなくて、たとえば自分たちの部であるとか組織であるとか、あるいは住民の方と対話しながらいろいろなものをつくっていくというケースもあるんですけれども、そういうときにも、この聞き書きそのもののやり方ということではないんでしょうけれども、どっちが強者か弱者かということでなくて、多面的な関係性の中でお互いがリスペクトできるような組織をつくっていく、あるいはそういう雰囲気をつくっていくということはわれわれの仕事にとっても重要ですし、われわれの組織運営としても重要だなと気づかせていただいて、非常に感謝をいたしております。

個人的なことですが、父が高齢なので死ぬまでに何とか話を聞いておこうと思って、個人的には聞き書きをしている最中で、聞いていると、本当にびっくりするような話がいろいろあっておもしろいなと実感しているところです。ありがとうございました。

**【六車】** ありがとうございました。

すばらしいです。聞き書きをしているんですね。最後に紹介したかるたは、こういった組織、会社でもできると思うので、イベントとしてやってみて、上司の話を部下が聞いてみるとか、つくってみるとかやると、おもしろいかもしれないですね。

**【司会】** ありがとうございます。

大阪府は2025年に万博をもう一回開催しようという構想があって、そのメーンテーマが高齢社会ですね。高齢をネガティブなものとしてとらえるのではなく、また、いかに予防するのかということとか、またはアンチエージングみたいな若々しく生きるという単純なことではなくて、高齢の弱さとか、そういったオルタナティブな可能性も追求するような万博になればいいなと私も思っています。

**【質問】** 私も質問というよりは感想というか、本当に腑に

落ちたなというところがひとつあります。

私は７年ほど母の介護をしました。最初は訪問介護という形でやって、最期は病院で亡くなりました。中でひとつ感動したのは双方向性ということですね。幸せなことに訪問医の先生とかヘルパーさんには恵まれました。私の母は短歌とか俳句をやっていまして、訪問医の先生が短歌を習うくらいで、次に「これはどうですか」とつくってきてくれる。ヘルパーさんも俳句をつくる。そういう幸せな介護を受けてきたのですけれども、今度、病院に行きますと、介護する側は非常に忙しい。そういうのは、毎回行っていると、よく分かるんですね。

すまいるほーむでは決して余裕はないと思うんですけれども、介護という言葉も違うかもしれませんが、こうやって双方向性の介護をして面倒を見てられる。この辺が非常にいいと思うんですね。究極的には収入も足りないということもありますけれども、あとは人手がないというところが問題かなと。すまいるほーむみたいのがたくさんできれば、われわれも安心して老後を迎えられるわけですけれども、現実的にはかなり少ないのではないか。

母が入所したところも、大食堂に大勢の方がテレビを見て座っているんですが、みんな会話はないんですね。ただポツンと座っていて、隣同士のコミュニケーションもないし、まったく一方的です。入浴やトイレも行列のように並んで、流れ作業なんですね。

こういう現実があって、見学したときに、ここへ入れて本当にいいかどうかと思いました。でも、母が自分で希望したので、一応入ってもらいました。だけど、持たなかったですね。それなりに夜もいろいろなことが起きていたようです。すぐ退所しました。退院して、すごく元気になりました。

ですので、すまいるほーむのような施設がもっとできるべきだと思いますし、それには人手とか資金も要ると思うんですね。こういう情宣をしていただいて世の中に広めていただければという意味では、きょうは腑に落ちたというところで感想でございます。

**【六車】** ありがとうございます。

実際、いろいろな試みをしているところは結構あるんですよね。大きな施設もそうですし、こういう小さな施設もそうですし、聞き書きにかかわらず、介護職員は心ある人たちが多いんですよ。そこで何ができるかというのは常に考えている人たちがほとんどです。

介護現場を実際に利用するというのは、そういった状況になってから初めて利用するわけですね。さっきの話とつながりますけれども、そこにかかわりを持っていくということかなと思うんです。どういうところに、どういう特徴があってということを普通に知れるようになっていくことが大切なのではないかな。半日いたら雰囲気はだいたい分かりますよね。

介護職で問題なのは離職率の高さなんです。それは給料の問題とかもありますけれども、そこに何か充実感を得られないと消耗してしまうということも当然あると思うんです。うちの施設では、給料は決して高くはないんですけど、少なくともこの４年間、離職者はいないです。それでも充実したものを持っているということは意欲へつながっています。

**【司会】** ありがとうございました。他に質問はありますでしょうか。

**【質問】** 本日は、お話、まことにありがとうございました。２点、お伺いしたいことがあります。どちらも市町村とのかかわり方についてです。

ひとつ目が、市町村に管轄が移られたというお話を

先ほど伺いまして、一方で地域ですとか周りの方々とのオープンなやり取りも重要だというふうに伺いました。なので、市町村にこういうこともしていただけたら、もっとオープンにできるなとお考えのこともあるかと思うんです。具体的にどういうことを市町村に期待されているか、期待されていることがあったら伺いたいと思います。

もう一方で伺いたいのは、期待されていることはあったとしても、うまくいかないことがあると思うんですね。なので、どういうところを課題として認識されているかというのを伺いたいと思います。

なんで伺っているかというと、私がふだん、ごみに関する政策を担当していて、ごみの収集は割と市町村が管轄されているんですが、ごみって結構プライベートなものだったり、市町村の中で担当が２、３年でかわってしまったり、なかなか入っていけなかったりするような分野でもあるのではないかなと最近、思っているんですね。なので、市町村の仕組みかもしれませんし、うまくいかなかったりするところもあると思うんです。

まとめますと、どういうことを市町村に期待されているかということと、どういうところを直していけたらいいなと思われているか伺えると幸いです。

**【六車】** まず小規模デイサービスの所管が、県から市町村に移ったのは国の政策によるのですけれども、財政抑制のために介護保険から外すという目的がありますね。市町村の事業に移すので、大幅には変えられないと思いますが、これから市町村が報酬を決めていくことができるので、下げていく方向にあると考えています。

そういう財政的な問題があるんですけれども、一般論として市町村の役所の人たちの意識が非常に低いです。何が低いかというと、私が一番問題だと思っているのは、来年の４月から総合事業という要支援１と２の方が介護保険から外されて新しい事業に移るわけですけれども、その形を決めるのに何をしたかというと、

いくつかの事業所から話を聞いただけなんですね。あと有識者に聞いただけです。何が足りないかというと、当事者からは何も聞いていないんです。ご本人たちがいったい何を望んでいて、何が足りないと思っているのかを聞くことをまったく念頭に置いていないということです。

私は何度かそれを指摘したんですけれども、先ほど認知症の予防の話が出ましたけれども、予防が強調される一方で、認知症の当事者の人たちがたくさんカミングアウトして発言されていますよね。あの勢いってすごいなと思っているんです。発言するだけじゃなくて、それによって社会を変えていこうと、実際変わってきている、認識も変わってきているところがありますよね。

あれは認知症の人だけの問題ではありません。介護を受ける立場の人たちはずっと声を聞かれないままいたんですよ、特に政策的な部分では。だけど、本人に聞かなければ分からないことはたくさんあるから、私たちは利用者さんに「認知症の方たちを見習って、みんなもどんどん発言していきましょう。そういう場にしましょう」と言っています。

だから、市町村が政策を立てるときには、最初に当事者に聞いてほしかったんですね。でも、それがなかった。だけど、批判がどこかであったんでしょう。１ヵ月月に１回、市町村の長寿福祉課から介護相談員が見学に来るんですが、この間、その人が来たときに、たまたまそこにいた要支援１、２の方に総合事業の参考にと

お話を聞いたんです。私も立ち合わせていただいたんですけど、すでに質問の型が決まっている。どういう型が決まっているかというと、今までのように長時間いるのがいいですか、それとも午前中だけいるのがいいですかとかですね。そういう型を決めているのです。それから、今のように専門職の人たちがケアしてくれるのがいいですか、それともボランティアさんでもいいですかとかですね。かかる費用も、専門職の人にやってもらって高いお金を払うのがいいのか、ボランティアさんにやってもらって安いお金の方がいいのかとか、そんな聞き方をするわけです。

どう答えますか。ご本人たちは、みんなすまいるほーむを好んできているから、今のままでいいと答えていました。でも、それはきっと何も反映されませんね。既成事実をつくっているだけなわけです。障害者のことは障害者に聞かないと分からないし、高齢者、介護を受けていることは介護を受けている方に聞かないと分からない。その姿勢を市町村には持ってほしい、社会に持ってほしいと思っています。

**【司会】** ありがとうございました。最後に中谷理事長に総括的なコメントをいただきたいと思います。

中谷理事長、お願いします。

**【中谷理事長】** きょうの先生のお話をお聴きしていて、理想的な高齢者施設をつくるため、先生がいかに素晴らしいリーダーシップを取っておられるかが分かりました。

市場メカニズムの本質は何かというと労働の商品化です。つまり、マーケットの評価によって人間の価値が決められてしまう。そうなると、要介護者とか高齢者はマーケットバリューがないから、価値ゼロになるのです。ある限度を超えると、価値はマイナスになってしまうわけですね。

「効率性」でどんどん切り捨てていこうというのがマーケットメカニズムです。その結果、人々の表面的な生活水準は上がってきたけれど、「人が最期まで豊かに生きられるか」という話とは無関係ですね。

六車さんは近代以降の市場メカニズムとか資本主義システムに勇敢に抵抗されている小さなコミュニティの話だけれども、現代文明に対するひとつのアンチテーゼとして提言されているわけで、すごく抵抗は大きいと思います。お話を聞くと「すごいですね、いいですね」と私が今申し上げているように皆さん感心されます。それは現代社会が失ってきたものをピンポイントで指摘して、しかもそれを実践によって何とか補おうとされているからです。

そのこと自体はすごく尊くて、なんとも批評の仕方がないんですけれども、現代文明全体に対する挑戦であります。これをどうやってもっと大きな輪にしていくのか。六車さんのような方をどうやって次々と生み出していき、こういう動きを日本社会全体に波及させることができるのかという非常に大きなテーマを私たちは突きつけられたのではないでしょうか。

課題先進国という言葉でよく言われますけれども、日本はこれから本格的な高齢社会に入っていきます。今後、日本において、人と人との関係性を重視したコミュニティがあっちこっちに生まれてきて、日本の介護ってすごいというふうになることが大きな夢ですね。

**【司会】** 改めまして、六車先生に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。（拍手）

---

**開催日：2016年7月27日**